

大妻女子大 前川 当子

1. 新らしい学問である家政学については、その定義、研究対象、研究方法等は、家政学原論研究者の数と同じ位あげられている。しかしながら、その内容は、ほぼ大同小異であり、家政学が家族ならびに家庭生活を研究する学問であるという点については、疑う余地の無いものとなった。別のいい方をするならば、家庭の生活現象を総体的に把握して、科学的に合理的に探究する学問が、他の諸々の科学のどれにも見当たらないからである。他科学の領域とは自ら異なることが、すなわち独自の領域を所有することが家政学の独立性を認識し得るものでもあろう。

2. 家政学について、いかなる研究調査がなされているか、それは家政学の現状を把える帰納的な方法の一つとして、わたくしは、逐次、家政学雑誌の掲載報文について全体的分析を行なっている。今回は1961年7月より1963年7月迄の報文158件について調査検討し、今日の研究の傾向などを考察する。

3. 前回報告に比べ、ここ2年間に被服関係の報文はさらに4%増加し、食物関係のものは2%減、住居関係は3%減、その反面、家族経済関係のは約4%増加し、家族関係の報文は約5%増となった。694報文中、自然科学系統が77%を占め、研究方法も実験実習などが69%となっている。これをみると家政学は自然科学であるかの如き錯覚に陥入る。応用科学である家政学の統一的認識にいたる研究の少ないことは問題である。